

Let's try ACP

実践
ルポ

楽しいがいっぱい!

子どもたちに体を動かすことの楽しさを伝え、運動・スポーツに対する積極性を引き出すアクティブ・チャイルド・プログラム(以下、ACP)。日ごろの指導においてACPを実践することで、子どもたちの動きは生き生きしてくるはず。子どもたちを楽しく遊ばせるためのヒントを集めてみた!



大学生と子どもが真剣にボールを追いかけるCLUB Levenならではの風景

吉村副学部長は36歳のときに、指導者研修でオランダに留学。1年たつたころ、日本とヨーロッパではスポーツに対する価値観がまったく違う

「オランダで見た地域の(スポーツ)クラブが本当に魅力的で、日本に帰つたらこういうクラブをつくりたいなと思いました」

吉村副学部長は帰国後、順天堂大学の教員となり、2010年にNPO法人としてCLUB Levenを立ち上げた。大学側の了解を得て、活動の際にはラグビー場などの大学施設を開放。クラブ会員を自由に行き来できるようにし

人工芝が敷き詰められたフィールドで、汗を拭いもせずにサッカーボールを追いかける子どもたち。前に立ちはだかるのは真っ黒に日焼けした大学生。おれー自身は真剣そのもの。子ども

年目を迎えた。設立者の順天堂大学スポーツ健康科学部・吉村雅文副学部長に、クラブ誕生のきっかけを聞く。

「オランダで見た地域の(スポーツ)クラブが本当に魅力的で、日本に帰つたらこういうクラブをつくりたいなと思いました」

吉村副学部長は帰国後、順天堂大学の教員となり、2010年にNPO法人としてCLUB Levenを立ち上げた。大学側の了解を得て、活動の際にはラグビー場などの大学施設を開放。クラブ会員

体を動かす楽しさを伝えることを理念とする

もと大人が存分にサッカーを楽しんでいる。ここは順天堂大学さくらキャンパス(千葉県印西市)のグラウンド。プレーしているのは、CLUB Levenの子どもたち。

監修／青野 博
日本スポーツ協会
スポーツ科学研究室室長代理
写真／成瀬 賢 イラスト／IKUKO

成長していくクラブ

連載(第7回)



監修／青野 博

日本スポーツ協会
スポーツ科学研究室室長代理

写真／成瀬 賢 イラスト／IKUKO



「大人も子どもも並列。一緒に参加している仲間。そんな感覚がいい」と言う吉村雅文副学部長

た。また、クラブ設立当時は、サッカー部の監督も務めていたので、最初のころ、子どもたちの遊び相手は主にサッカー部員が務めた。「順天堂は指導者や教員志望の学生が多い大学です。子どもたちと一緒にサッカー遊びを楽しむなかで、学生たちにも成長できる可能性があると思います。子どもと触れ合うことによって、マニエアル通りではない、子どもたちの変化を目の当たりにできるのがいちばんの収穫ではないでしょうか。だから学生には（子どもだからといって）容赦するな」と言っています。もちろん子どもにケガをさせてはいけないし、体格の違いはありませんが、容赦する必要はありません。一緒に遊んで、楽しめばいいんです。年齢の違う者同士で遊べば、大人は子ど

田んぼでの泥んこ遊び。泥だらけになりながらの楽しい経験



CLUB Levenのまとめ役を務める井口祐貴さん

CLUB Levenのマネジャー的な役目を果たす大学院生の井口祐貴さんは、キヨトンと見ている取材者やカメラマンに説明してくれた。活動で実施するマニエアは、学生たちが事前に打ち合わせを行っています。もちろん子どもにケガをさせてはいけないし、体格の違いはありませんが、容赦する必要はありません。一緒に遊んで、楽しめばいいんです。年齢の違う者同士で遊べば、大人は子ど

もをカバーするし、その姿を見て子どもは頑張ります。すると自然にうまくなる。そこがスポーツの素晴らしさですね」

幼稚期からのACP普及ワーキンググループ班員の青野博氏も設立当初からCLUB Levenの活動に注目して始めた。

田んぼでの泥んこ遊び。泥だらけになりながらの楽しい経験

「CLUB Levenは、子どもたちにサッカーの技術を教えるというより、楽しさを伝えることを理念としています。そういう意味では、ACPの理念とも合致します。結果的に多様な動きが身についたり、体力向上につながります。子どもたちにも成長できる可能性があると思います。子どもと触れ合うことによって、マニエアル通りではない、子どもたちの変化を目の当たりにできるのがいちばんの収穫ではないでしょうか。だから学生には（子どもだからといって）容赦するな」と言っています。もちろん子どもにケガをさせてはいけないし、体格の違いはありませんが、容赦する必要はありません。一緒に遊んで、楽しめばいいんです。年齢の違う者同士で遊べば、大人は子ど

もをカバーするし、その姿を見て子どもは頑張ります。すると自然にうまくなる。そこがスポーツの素晴らしさですね」

幼稚期からのACP普及ワーキンググループ班員の青野博氏も設立当初からCLUB Levenの活動に注目して始めた。

子どもたちとの運動遊びを通して大学生も成長する

CLUB Levenの現在の活動は、毎週土曜日の午後、2時間程度。

「研修会でACPのことを初めて知りました。子どもたちの体力低下と、指導者が子どもの多様な動きを引き出すことの重要性を学んで、その後、成田市内のいくつかの幼稚園でACPを実践して、現状を痛感しました」

こう言う小貫さんは、昨年のACP実践がきっかけとなり、こ

としから大学院でスポーツのことを探り深く学ぶこととなつた。

大学生時代からCLUB Levenに関わってきた井口さんは、子どもたちと楽しそうに遊ぶ後輩たちを見ながら話してくれた。

「私も教員志望なので、大学生が子どもたちと触れ合って変化していくのを見るのが、すごく勉強になります。子どもたちに何かをしてあげなくてはいけない、提供しなくてはいけない」ではないんですね。子どもたちの反応を受け止め、さらには自分自身も楽しむためにはどうすればいい

すが、それは二次的な成果です。とにかく体を動かすことが楽しいということを体験してもらいましょう。そんななか、昨年のACP研修会に参加した大学院生の小貫凌介さんや、ACPガイドブックで学んだ学生たちが、ACPのノウハウをアイスブレイクなどで活用している。

「研修会でACPのことを初めて知りました。子どもたちの体力低下と、指導者が子どもの多様な動きを引き出すことの重要性を学んで、その後、成田市内のいくつかの幼稚園でACPを実践して、現状を痛感しました」

こう言う小貫さんは、昨年のACP実践がきっかけとなり、こ

としから大学院でスポーツのことを探り深く学ぶこととなつた。

大学生時代からCLUB Levenに関わってきた井口さんは、子どもたちと楽しそうに遊ぶ後輩たちを見ながら話してくれた。

「私も教員志望なので、大学生が子どもたちと触れ合って変化していくのを見るのが、すごく勉強になります。子どもたちに何かをしてあげなくてはいけない、提供しなくてはいけない」ではないんですね。子どもたちの反応を受け止め、さらには自分自身も楽しむためにはどうすればいい



取材日には学内で花見を実施。小川道夫さんのオニギリをほおばつた

遊びだ。

順天堂大学さくらキャンパスの周辺は、田畠が広がるのどかな地域だ。しかし、そのような地域にもかかわらず、「田んぼの中に入ったことがない」という子どもが意外と多いことに気づいた井口さんが、近隣で「佐倉小さい農園」を経営する小川道夫さんに相談。田植え前の田んぼを借りて、泥だらけになりながらサッカーやさまざまな遊びを楽しむイベントを開催した。今では、小川さんもCLUB Levenに入会し、子どもや学生たちと一緒に汗を流している。

最後に、吉村副学部長に、理想としたオランダのクラブにどの程度近づけたか聞いてみた。

「雰囲気はとても近いと思います。『Leven』とはオランダ語で、人生」という意味です。生きていくなかで貴重な機会になればいい、という思いで名付けました。大学といえばいけません。大学の素晴らしい施設を地域に還元しながら、地域を発展させていくといふことです。そういう意味では、CLUB Levenは大学が持っている潜在力を生かせる一つの取り組みになります。すると考えています」



ACPを実践した小貫凌介さん

ACP そこがポイント!

昨年のACP研修会に参加した小貫さんが、取材時に実践した運動遊びについて参考になるポイントを、青野先生に解説してもらった。



ACP研修会で学んだことを、着実に実践していました。具体的には、『幼児期からのACPガイドブック』4章「幼児の指導法・指導技術」～「1.よい指導者としての観点」(右上のQRコードで確認できます)から、以下3つの観点をそのポイントとして挙げたいと思います。

●多様な動きを経験させる

まずは、あえてサッカーとは関連がない動きを含む遊びを実践しようとする意図が見えました。この日は運動遊びの冒頭に「動物に変身」、「大根抜き」を実践していました。特に、小さい子どもは模倣遊びが大好きです。指導者からの必要最低限のことばがけに基づいて、子ども独自のイメージが表現されていて楽しめますね。さらに、指導者が示す動きなど他者の動きをまねすることはスポーツにおける上達の近道ともなり得ます。また、その次に実践した「大根抜き」はスキンシップとコミュニケーションを図りながら遊べますので、幼児・児童にとってはいわゆる“鉄板”的遊びですね。そして、徐々にサッカーの動きを含む遊びへと展開させながらも、ドッジボールのルールをアレンジすることで子どもたちから多様な動きを引き出していました。



「動物に変身」で地面をハイハイ。「大根抜き」への準備段階



「大根抜き」への遊びの移行もスムーズだった

●次々にプログラムを展開させる

約30分間の時間帯において、この日は3種類の遊びを実践していました。実にテンポよく運動遊びを展開させていました。前述の通り、運動遊びの導入時にシンプルで体を動かすこと自体が楽しい遊びを実践したことが、ルールの説明などに要する時間を短縮することにもつながり、それが、子どもたちの意識を指導者のもとへ引き付けられる要因となっていたようです。まさに、「まずは体を動かす」ことで子どもたちの心をつかんでいました。そして、自由にイメージを表現する／人の動きをまねする模倣遊びから、多少のルールに基づく「大根抜き」へと展開する際の流れ(子どもたちの動き、指導者からの声のかけ方)について、この日は、指導者が最も気を使って工夫されたポイントだったようです。

●異年齢交流を利用する

これはCLUB Levenの最大の特徴ですね。子どもたちと関わる指導者役の大学生が上から目線で何かを教えようとするのではなく、子どもの輪のなかに入って、一緒にサッカー(運動遊び)を楽しむことがCLUB Levenにおける第一義とされています。一緒にサッカー(運動遊び)を楽しむ仲間として大学生と子どもが交流するからこそ、お互いにとって学べることが多いそうです。大学生が一生懸命に楽しむ様子を見て、子どもたちも頑張る、あるいは大学生のプレーをまねすることで上達する、といった現象が見られます。また、大学生が子どもたちと接する際の態度を見て、小学生のなかでも比較的年長の子どもが、年下の子どもに対して思いやりをもって接している様子が実に印象的でした。



子どもと大人と一緒に遊ぶことが大切